ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　二人が辿り着いた、彼等への対処法。それは、実にシンプルなものだった。ズバリ、敵の攻撃を耐えて、ライフルが撃てなくなった時に『破壊光線』をぶちかます、というものである。

　勝算は、二人にはあった。戦えるポケモンは全部で五匹いる上に、その内の一体は進化して、大幅に強くなっていたためである。急いで弾が装填されているが、今はライフルによる攻撃も無い。連射される『ロックブラスト』も、十分に対処出来るレベルだ。勿論油断は禁物だが、やりきれる確信が、雅也と太一にはあったのだ。その時は、誤算があることなど誰も考えもしなかった。

「……水鉄砲！」

「ぼ……ボルテッカー！」

　二人の指示が同時に飛び、二匹のポケモンの技が飛んでくる岩に炸裂する。粉々になった破片が、川に散らばった。『破壊光線』が発射出来るようになるまで、後十分程度。

　そこからは、実はもう二人とそのポケモン達の気力の勝負だった。密猟者との戦闘が始まってから、もうかなり――少なくとも十五分以上――立つ。雅也が拓馬と戦うと、偶に十分程の長期バトルになってしまうことがあるが、今回の戦闘はそれを超えている。勿論太一も、基本は敵を見つけたら即『破壊光線』をぶち込んで決着させるので、今回みたいなことは経験が無い。

　二人とそのポケモン達は戦いに集中しているので気がついていないが、実は体力は限界に近づいてきていたのだ。そして、その集中力も、気がつかないレベルで切れかけていることにも。

「まだまだぁ！」

「いくぞオラァ！」

　もしこれが『気が付く』レベルだったら、二人はもっと危機感を持っていたのかもしれない。だが、勝算の見込みがあった二人は、ついぞその事実を知ることは無かった。

　誤算に気がついたのは、本日何発目かの『ロックブラスト』が飛んできた時だ。

「リオル、はっけい！　フシギダネ、蔓の鞭！」

　そう叫んだ雅也。それに応えようとする二匹だったが、攻撃が岩に命中すると、今までの手応えを感じないことに気がついた。リオルの手の平と、フシギダネの緑色の蔓が岩に当たって数秒後、岩に亀裂が入り、大きく二つに割れる。

「雅也、来んぞ！」

　太一の声に、雅也は男の方を見る。ついにライフルへの弾の装填が終わったらしい。既に男は、彼等に銃口を向けていた。指が引き金に引っかかっているのが、二人の目にもぼんやりと映る。腰を低くして、ちょこまか動き回る二人のどちらかに向けて、男は引き金を絞った。

「――！」

「――なっ！」

　弾丸が、仰け反る二人の間をすり抜ける。速い、と、二人は感じた。それと同時に、雅也は自分自身の足腰の動きに、少し違和感を覚える。

「……太一！」

　だが、太一はガクッと膝から崩れた。だが、考えてみれば当然のことだと、雅也は気づく。太一は、何か特別な訓練を受けている訳ではないのだ。毎日走り込みをしている雅也ですら、下半身が少し変だと感じているのだから、太一は『少し』どころでは無い。それに気がつかなかった自分自身を、雅也は責めた。

「まっ……まさか……！」

「バカっ！　こんぐれー平気だっつぅの！」

　最後まで言おうとした雅也を、上から被せるように太一が怒鳴る。太一からしてみれば、覚悟を問うようなことを言った以上、自分が先に倒れる訳にはいかないと考えていた。幸い、まだポケモンに指示は出せると思ったのだろう。事実、今の声には力がこもっていた。

　だが、それが、本人でさえ気がつかない焦りとなって出てしまった。

「ま――」

　何か言いかけた雅也だったが、時既に遅し。ミニリュウが冷静だったら良かったのだが、周りの仲間が傷つく中、自分は川の中に潜んでいたことでの申し訳なさ故に、彼自身も焦っていた。さらに、太一とミニリュウの目に、ライフルの弾が命中しないことで苛立つ男の姿が飛び込んでくる。彼も焦っているのだろうか。引き金を引こうとする指が震えて、引き金に指を添えようとするのに失敗している。

太一の声が、辺りに轟いた。

「ミニリュウ、破壊光線！」

　主人の命令を疑うこと無く、はやる気持ちを抑えること無く川から飛び出たミニリュウの額に、エネルギーが集まり、男とゴローン目掛けて放たれた。

　だが、そのタイミングは当初の予定とは違う。まだ、ライフルには弾が残っていた。

　いや、それでもタイミングとしては悪くなかった。男は、引き金を絞るのに失敗していたからだ。まずまずの隙があったと言えるし、雅也が太一の立場でも、何も問題なければ攻撃していただろう。

　しかし、太一はタイミングを見誤った。それに気がついたのは、自分が何を叫んだのか、自身の耳にそれが届いた時だった。

　勢いよく発射された『破壊光線』は、最初はいつもの勢いで男に向かっていった。だが、川の真ん中を過ぎたあたりで、徐々に光線は細くなる。色も、少し薄くなっていく。金色の太い光線は、男の元に到達する頃には黄色く細い光線になっていた。

　スピードはあるものの、素人でもその攻撃を躱すのは容易い。元々、空中で放たれた攻撃の照準の精度が甘いのも相まって、男が少し体を左にずらすだけで、ミニリュウの『破壊光線』は森の奥へと通り過ぎていってしまった。

「やっ……べ……」

　太一の声は、今まで聞いたこともないくらいか細く、弱々しかった。この時で、ミニリュウがちゃんと『破壊光線』を使えるために、後五分以上は粘る必要があったのだ。

「――ピカチュウ！」

　そして雅也達にも、悪い癖が出ていた。

リオルとフシギダネが息を切らしているのを見た雅也は、すぐさまピカチュウに指示を飛ばす。ピカチュウはその命令を聞くまでもなく、既に砂利を蹴っていた。川に落ちた大きな岩の破片の上を飛び移りながら、右拳に電流が纏う。

　男が自分達のところに飛んできたピカチュウに、ライフルの銃口を向ける。同時に、ゴローンの『ロックブラスト』が雅也達のところに向かって飛んでいった。

　刹那、銃口から弾丸が放たれる。弾丸は、ピカチュウの体の正面を飛んでいくが、引き金を絞った瞬間を見逃さなかったピカチュウは、空中で体を仰け反らせて、弾丸をスレスレで躱した。

　着地したピカチュウは、続けて二つ目の『ロックブラスト』の岩を出すゴローンに向かって突っ込んだ。

「雷パンチ！　アイアンテール！」

　どうやら、どうにか躱したらしい雅也の声が、ピカチュウの耳に届く。ゴローンの顔面に回り込んだピカチュウは、驚くその面に、拳を撃つ。続けて、硬くなった尻尾をぶちかました。

だが――

「……危ない！」

　全く効いていない。雅也の声が聞こえた時にはもう、ピカチュウは岩をぶつけられて、吹っ飛ばされていた。ピカチュウは川に落ち、そのまま流されていく。

「……さて、ガキども。そろそろくたばってもらおうか！」

　ニヤッと笑う男とゴローン。

　銃口が、唖然とする二人とそのポケモン達に向けられていた。